

第25回 人間・環境学フォーラム 新入生歓迎記念講演会

「秘すれば花」

4月7日(木) 16:00-17:30 人間・環境学研究科棟 地下大会議室

「情報を秘すれば…」

日置 尋久 先生 (人間・環境学研究科 共生人間学専攻) 16:05-16:40

人類の歴史上の大変革の一つに情報ネットワークの出現が挙げられる。我々の環境はコンピュータとネットワークにより変化しつづけており、ネットワーク上において、膨大な量のデジタルコンテンツが作られ、やりとりされている。このような情報化社会ではコンテンツの用途も多岐にわたり、実生活の中でもそのようなコンテンツの存在が大きくなりつつある。そこでコンテンツを安心して使うことを可能とするために、コンテンツの保護や真正性の検証などが必要になる。そのような目的に「情報を秘する」データハイディングという技術を利用する試みが近年行われている。またデータハイディングは秘密情報の保護、情報の統合などにも使われる。講演ではネットワーク社会でデータハイディングを活用する様々な事例をとりあげて紹介する。

「隠された花、見出される花」

須田 千里 先生 (人間・環境学研究科 共生文明学専攻) 16:45-17:20

「アナタノ小説、友人ヨリ雑誌借りテ読ミマシタガ、アレハ、ツマリ、一言モツテ覆ヘバ、ドンナコトニナルカ、ト詰問サレルコト再三、ソノタビゴトニ悲シク、一言デ言ヘルコトナラ、一言デ言ヒマス、アレハアレダケノモノデ、ホカニ言ヒ様ゴザイマセヌ」(太宰治『走らヌ名馬』昭和11年)。

一言で説明できないものが文学なのであり、それはテキストの奥にひっそりと身を潜ませています。ストーリーを追うだけでは見過ごされがちな、あるいは明示されていない内容を、一人一人が読み取り、または想像することによって、作品はその都度、新たな相貌を見せるようになります。研究者は、作者によって隠された「花」を、何とか解き明かそうとします。

この講演では、一人称の語り手が自分を取り巻く物語を理解できないというスタンスで書かれた、泉鏡花『化鳥』(明治30年)・芥川龍之介『地獄変』(大正7年)について、また、隠蔽された事実が最後に作品の全体像を反転させる芥川『奉教人の死』(大正7年)について、お話しする予定です。

司会 小木曾 哲 (人間・環境学研究科 相関環境学専攻)

主催：人間・環境学フォーラム実施委員会